第九十三回

史跡めぐり資料

（大相模地区）

越谷市郷土研究会

山崎善司

第九十三回　史跡めぐり案内

一、日　時　三月二十五日　第四　日曜日

一、集　合　越谷駅前　午前九時　〇分　集合
　　午前九時三十一分　吉川車庫行　乗車

一、行　先　幸町入口　下車
　　飯島八塚　地蔵八塚
　　観音寺　中村家霊名簿　八柱の伝説
　　八坂神社　内池の伝説と水神社
　　久伊豆神社　古墳　昼食　やま平食堂
　　中村千枝氏宅　構堀　墓地　塚
　　日枝神社　馬場（バンバ）野
　　大聖寺（不動様）取水口　遺溝
　　安養院跡　十一面観音堂
　　福寿院跡　藤塚墓地

一、帰　路　藤塚停留所　越谷駅下車　解散

一、会　費　七百円也　但し、昼食は各自持、食事所有り

以上

晴々と　産声あげて　梅の花　梅魚

ゆあみしてすすみ男と成にけり　水辛

夕月や　いつもの尽の　人の影　喜好

つらなりてともに明るし雪の山　市山

手をうてばあいと答つ水の音　三花

大相模郷

大相模郷の成立は、現在の所、莫然とした、意見のみにて、皆目解らないと云う処であるが過去に何人もの先覚の士が、此の問題に取み、大相模郷の歴史を書き残しているが、古くから開けていたと云う事だけで、其の解明がなされていない。

此れ迄の、定説とする処は、「古き時代には此の辺は、海中であつて、東京湾が関東平野の奥深く入り込んで居つたが、其の湾岸である関東ローム層の高台には、石器時代からの居住跡があり、貝塚等の発掘により、古代人達の居住が立証されている。然し乍ら、低湿地の綾瀬川・元荒川添いの微高地は、海が後退し、沖積層の内の高い所が水上に現われて、所々に島が出来、低地に河川が出来て、自然堤防が形成されて陸地が固定されてから以後の事であり、関東ローム層の高台地帯とは比較にならぬ程、新しい時代である。」と、其の通りであるが、其れでは其の時期は何時かと云うことになると、前述の如くである。

最も古い記録は、同村内不動尊の縁起書の中に、（寛文年中に亡失し伝説となつてしまつた）考謙天皇の御代、天平勝宝二年（七五〇）、良弁僧正は、相模の国大山で、不動の霊容を拝し、一本の木の根本と来本で尊像二像を彫刻し其の根本で刻んだ方を、大山根本不動と云、末本で彫刻したものを、不動坊と称するものが霊夢のお告げの尽、彼像を負ひ、当所へ来る所、笈（背負う箱）が俄かに重くなり、一歩も動く事が出来なくなつた。是れこそ有縁の地であらうと、其処に不動を安置した。其れから其地を真大山とし、其の地名を大相模と称したと伝へられて居る。此の伝説は、其のまま信ずる事は出来ないが又一説にはは時代は下つて平安朝時代、村上天皇の御世天慶二年（九三九）の創建とあるから、或は、其の頃ではないかと思ふ。此の天慶年間は、平将門が乱を起した時で、成田山の不動様が将門懲伏祈願の為め、創立されたと云はれる年である。

又村内、中村家の過去帳には、

初代　徳蔵院蓮法弘声居士　延久元年三月十八日没　小相模次郎　俗名

二代　正等院道祐覚孟居士　天永三年（一一一一）七月十九日卒　未詳

三代　宝性院宗阿日教居士　長寛元年（一一六三）三月三十日卒　未詳

四代　桂光院是心円満居士　承元二年（一二〇八）五月三日　卒　未詳

以下略

と見え、其の古さは村内一である。越谷市史では、桓武天皇の後裔平良文の支族、千葉平氏の枝族で武蔵国騎西郡に播拠した野与党の系譜の中に見える、大相模二郎能高　二代大相模二郎兵衛尉能忠、を比定している。

此の能高の叔父に当る、八条五郎光平（野与党系図）は、建久元年（一一九〇）上洛の節に

頼朝の供奉人の中に見える人物であるので、はたして、野与党系図の中に見える大相模二郎能高と、中村家の初代である小相模次郎とが同人であるかは、断定は出来ないだろう、時代的に言えば、四代目の人物の生存中の出来事であるがともかく、大相模二郎能高が此の地に拠していた事は事実であろう。

以上の如く記録に見えるものは、其れ以外には、往古のものは見当らない。

大相模地域に古くより伝承されている事や、出土品等を記すと、越谷市史通史一・七〇頁

越谷市に関する古代の遺跡、遺物としては、草加市との境を流れる綾瀬川から縄文晩期の丸木舟が発見されている他、「埼玉県史一」に記載されている大相模古墳がある。然し此の時の遺物は、市内には見当らない。

此の大相模古墳とは、大相模耕地のほぼ中央にあつた通称「一本杉」附近ではなかつただろうか。此の一本杉は、広い水田地帯の中ほどに小高い丘があり、其の上に植えられていたもので、遠くから望見出来たものである。此処は、「お墓がある」「キビが悪い（気色が悪い）」など昔から言い伝えがある所で、一本杉附近は従来から土地が高く、土抜きが繰返され、此の丘も次第に縮少されて、昭和四十年代には径二メートル前後の高さ一メートル前後になつてしまつた。

昭和三十七年二月、耕地整理の際、一本杉附近の排水溝工事で甕一個が発見され、其の後、多数の土器類が発見きれるに及び、昭和四十一年十二月と翌年三月の二回にわたり発掘調査が行なわれた。

其の結果、見田方遺跡と名付けられ、其の時期は、出土品の土器其の他から、六世紀末より七世紀初頭と発表された。

一本杉の古墳は、埼玉県史にある大相模古墳と同一であるか否かは、土もなくなり、杉の木も無い今では論ずる事も出来ないが、東方中村氏（久助ドン、元耕作者談）四十年程以前から私の代で、其の頃すでに、二坪程の塚であつて昼には、其処で座つて食べられたが、息子の代の時には、小さくなり、腰掛けるだけになつてしまつた。と以上の話から想像すると、ほんの塚程度の小さなものであつたろう。はたして、古墳か塚か判然としないが、越谷市史では一応埼玉県史に記載されている古墳であるとの見解を取つている。

然し乍ら、見田方遺跡に付いては、六世紀末から七世紀初頭の遺跡であるとの見解には、尚信じかたいとして、「大相模地域は、東国の辺境の地ゆへ、文化の伝波が遅く、中央より、数世紀の後れは当然であり、八世紀頃の遺物であると主張して論議される向もある。

貝塚

吉川町榎戸地区には貝塚がある、古利根川の川岸で大相模より一五〇〇メートル程の処である。明治時代の事で、古老の話しによれば、西方字沼端の土窪田に、地連根を作り、之を掘り採る際に、丸木舟が発見された。此の地は、八条用水の端にて、隣村麦塚村との境である

丸木舟

別府

別府・四条・八条・三丁野等の地名が近隣の村落に残つているが、これは、孝徳天皇の御代、大化の新政があり、班田収授制が施かれた。此の為に、班田図籍というものが必要となり、条里制が施かれ、其の時の遺名と云はれている。此の大化の改新の為に、古来の国造・県主の行政を監督する為に国司を派遣した。国司は、国府に居住した為、国府から遠隔の地には、別に支庁を置いた、即ち別の府と云う意味で、別府と称した。現在の別府は其の頃の支庁のあつた所であると云はれる。

氏神

大相撲郷は、武蔵国騎西郡に属し其の郷の氏神として、久伊豆神社を祭祠している。久伊豆神社の分布する地域は、埼玉郡・騎西郡と呼ばれる地域で、古くは、埼玉命（サキタマ）の名が見える。前玉神社と云う神社がある。祭神は一様に大国主命・大己貴命を祭り渡来神を祭祀した神社である。

大相模久伊豆神社の裏山から西南にかけて、木立の生える小高い丘がある。此の丘を良く見ると、古墳と思はれる形跡が見える。神社は、此の古墳の土を取りくずして境内としたと思はれる。そして其の外側から見ると二米程の差があり、砂地である、明らかに盛土である事が解る。

古墳

此の古墳は、原形が解らぬ程変形しているが、前方後円墳を思はせる型態である。今回第九十三回史跡めぐりの下見調査中に、発見したものて現在迄の処、出土品の伝承を聞いていない。「埼玉県史」にある大相模古墳が或いは之であるのか、（見田方遺跡の一本杉古墳）新しい発見であるのか今の処断定は出来ない。

私市部

騎西郡は、私市部の入植地にして騎西町字振古屋には、私市城（キサイ城）の名が残存している。又私市党の事を私党（シノトー）とも呼び篠津と云う名も見える。其の遺名が残つている。其の後、野与党一族の播拠する処となり、私市部一族は、熊谷・行田地区に後退している。

私市部（キサイチベ）は、古代の天皇の后（キサキ）の卦戸、つまり部民の設置された処で、其の初見は、敏達天皇六年（五七七）とされているが、各地に私市部が多く見られるのは、天平十年（七四八年）である。

私市矣自七代の孫「浜人」と其の息子「広成」は、神護景雲三年（七六九）奈良西大寺建立の時、其の資財を寄進し、従五位上に補任されている。

「続日本紀」「西大寺建立の時、浜人・広成為大福者、布千五百疋、稲六万束寄進、達上聞、叙従五位上」と見え、同じ

時入間部の大伴部直赤男は、「献西大寺商、布千五百段、稲七万四千束墾田四十町、林六十町、至是其身滅亡　追賜従五位下、等見え、当時すでに、墾田畑林等を所有していた、富豪であつたとしている。

「安閑記」に、武蔵国造笠原使主と小杵とが争い、使主が、国造職に就任したのが、安閑元年（五三二）で私市浜人・広成の七代の祖、矣自の年代は、此の時代に比定される訳で五三〇年代には「私市」の民として「埼玉郡」（サキタマ）に居住していた事が推量されるのである。

此の私市部は、職業部であるが、何を職業としたか、定かではない。「浜人・広成」とが西大寺建立の功に依り、其の孫「黒山」が「私市部領」となつた事は明らかで、其の曾孫「家盛」は、「武蔵権守」に累進しているのが私市系図によつて知る事が出来る。此の私市系は、帰化人である出雲系の大巳貴命を産土神としている久伊豆明神を祭祠している埼葛武土団　岩井　茂　記より

奥州道

越ヶ谷瓜の蔓には、「鎌倉御代の節、奥州道中共云ひ、往古奥州道は千代田御城下より、千住秋屋の里、大原通り、八条堤通り、南百角より西方、中町横丁より、元荒川」と有り、又、往古之儀、不相分候へ共、御入国後も、千住より、八条通り、南百、西方、中町横丁へ通り来候、日光山御遷葬之後、千住より、中町橋迄之道筋と相成申候」。と有る如く、大相模の西方は、日光道中が出来る迄は、奥州街道の重要なる宿場町であつた。現在でも、陣屋の家・赤門の家等と云はれる家号の家が其の名残りとして残つている。

以上の如く考察して来ると、貝塚より見ると古利根川・元荒川の合流点の川向うではあるが一五〇〇メートルの地に古代の遺跡がある。年代不詳ではあるが、同村内よりの丸木舟の出土が伝承されている。　地名より見ると、大化の改新（六四五）により、律令制度にもとづく条里制度の遺名が残されている。　古文書・伝承の面より見ると、天平勝宝（七四九）よりのものが伝はり。　古墳・遺跡より見ると、六世紀後期の出土品が発掘されている。

大相模地区の歴史は、中央の歴史の中には一行も出て来ないが、其の痕跡だけは、見る事が出来るのである。見田方遺跡の発掘は其の点において、越谷市の、六世紀以前の、開発のベールを脱いでくれた事になる。

此処に大相模西方、久伊豆神社宮司、秋山幸之助氏所有、同村飯島出身、故人中村徳二郎氏の筆による、大相模郷土史資料を引用する。

大相模郷土史

昭和十四年拾月記稿　中村徳二郎

第一編　大相模郷の起源

第一章　大相模の名称

大相模は、東に吉川、南に八条・川柳、西南に登戸・西に瓦曽根、北に元荒川を隔てて増林の各村に隣し、元荒川が北に、古利根川が東に村内には谷古方用水、葛西用水、八条用水の取水口と其の流れがあり、埼玉東部としては、比較的高地であるが、処々に低地を持ち、殊に川柳村との間に存在する田の一部には、後年迄も収穫の稀なる湿地帯があり、土地に高低があつた。其の高き処には、上代には早くも収穫のある耕地と、人家が生じたけれど、一部底地は徳川末期の後年迄、沼の如くに水の絶ゆる時がなく、従つて其の完全なる開墾は、時期大いに後れている。即ち其の最も古きものは、大宝令時代既に存在し、晩れたる処は、徳川期にも未だ耕地化が出来なかつたのである。

而して、昔の大相模は現在の如く、七ヶ村即ち、西方・東方・見田方・飯島・南百・別府・四条・千疋を呼称したのではない。西方の大部分・東方・見田方の大半を呼んだものである。「以前は、此の部分を大相模郷と呼んだが、分村の時、西の部分を西方、東の部分を東方、今一つの部分を見田方と云うた」と旧記「註（1）」に見える処である。そして其の分村は正保・元禄時代には、即に行なはれていた「註（2）」ものであるから、恐らくは　慶長年間の検地以前には唱えられていたものであらう「註（3）」。

然らば、大相模と云う名称は、何に依つて起つたか、？　古来大相模に於て最も有名なものは不動尊である。開期は、天慶二年と伝えられ中世大田氏の信仰懇かりしを、其の縁起に「註（4）」残しているが、縁起には、「昔古、不動坊なるものがあつて、相模国大山不動を此処に安置し、相模の大山より来るが故に、此の地を大相模と呼び、此処こそ真の大山不動なるが故に、真大山と唱えたとの意味が書いてある。

大山不動と称する寺院は、関東には幾つか存在「註（5）」するのであるから、果して其の侭に信ずる事が出来るかどうかは疑問であるが、然しながら大相模の名称が相模国に深き関係を持ち、不動尊に深く縁故のある事は先づ確実と見て差使えないと思う。

即ち、荘園時代に不動尊を信仰の対象として其処を政治の中心地となし、大相模郷なるものが存在したる事は、北条氏繁文書にも顕はれている。

其して、大相模郷の範囲は、西方の内、山谷を除く全部と、松土手、東方の全部、見田方の内小名飯島を除く全部である。

山谷は、後年山谷村として成立し、「註（6）」分村後に漸次開拓されたものらしく、飯島村は、他領に属していた「註（7）」事が窺はれる。

而して、西方・東方・見田方と雖も、「註（8）」勿論、今日の如き姿ではなく、極めて僅少なる戸数であつたであらう。其の内、西方の不動尊附近は比較的賑わいを成し、幾つかの寺院が不動尊中心に、其の附近にあり、不動尊が支配していた。「註（9）」

註1　新編武蔵風土記稿　一七〇頁　雄山閣発行

註2　正保年中改定図及び元禄年中改定図に分村して記載さる。

註3　慶長十八年の記録に埼玉郡東方村浄音寺とあり、文禄年間の記録には、大相模浄音寺とあり、文禄は慶長の直前なれば、太閤検地に依り分村せしものか。

註4　不動尊縁起に曰く、「一宇を創め自ら安置して供養し、以来郷を、大相模と称し、山号を真大山、寺名を、不動坊と云う」と言る。

註5　神奈川県湯河原奥に、大山の分身と称する、大聖不動あり。北足立郡梅島村近に、大聖院関係不動あり。廻前区内、其の他多し。

註6　山谷村は、正保改定図には無くして、元禄改定図に始めて載る、其の頃開墾されたものか。慶長年間の記録に、埼玉郡飯島村とあり、独立の村にして、大相模に入らざりしか。

註7　新編武蔵風土記稿大相模郷

註8　日本中世に於ては、郷主が寺院に拠して、多く政治を行う。

註9

追記

此の如く、「大相模」の名称は、不動尊と密接な関係を持つものであるが、然し此の土地を初めよりかく呼んだか何如かは、疑門の余地がある。当村東方中村重太郎氏の一統は旧家と云はれているが、其の家系に依ると、延久二年に始まり、祖先の俗名を「小相模次郎」と呼ぶ者が過去帳に記されている。小相模はおさがみと呼ばれる事もあり、享保以前は「大模」と書かれた事もあるらしいから、小相模が膨張して、不動尊が出来る様になり、幾つか合村して、大相模となつたのではあるまいか。されば、武蔵風土記稿も、今に唱ふる処の合郷として、大相模郷、合村三十七と記されてある。

而して、大相模が中古より呼称されし事は、略々想像されるが、然し不動尊縁起の如く、天慶二年より其の地名が起つたか否かは、直ちに断定はなし得ない。延久二年の小相模次郎と、武蔵七党系図の大相模二郎とは、果して同入なりや否やも、定かに判定し得ないが故に、小相模が大相模となつた其の年代は不明の事である

飯島

飯島は慶長年間の記録によると、埼玉郡飯島であり、大相模とは別村であつた。飯島耕地は飯島九兵衛の所有地が多かつたから、其の名があるとも云はれるが、おそらくは開発者であつたであろう。元荒川をはさんで対岸が中島村と云う所から、川にちなんだ名であるとも云はれる。

飯島村内に、中村嘉四郎氏の祖先で、此の土地の開拓者の一人である中村氏があつた、其の子に四人の子があり、其の中の一人、中村平右衛門が、三郷市三輪ノ江に新田を開いたので、飯島新田の名がある、其の地には、中村・宍倉等の姓が多い。

八塚

見田方飯島の県道の端に小さな塚がある。約二坪程のものであるが、以前にはづつと大きかつたが、耕作の度に削られ其の上に、県道が広がつて今は、見る影もない塚であると言はれても分らぬ程になつてしまつた。以前には此の附近に計八つの塚があつた。其処で此の塚を八塚と呼んでいるのであるが、八つの塚はいづれも田の中にあり、耕作している内に次第に削り取られ、又発掘されて、何時しか其の形跡を無くしたが、口伝によると、此の附近は、古戦場であり、戦没者を埋葬したものであろうと言われている、発掘を試みても、見るべき物は無かつたが、武具と思はれる、鉄片や、甲冑の一部であろうと思はれる物が多少見られる程度であり今は土と化して昔時を語るものは見られなかつたが、或いはそうと思われる。又此の塚は、八塚地蔵と呼ばれているが、八つの塚に夫々地蔵があつたので此う呼ぶのである、地蔵は、見田方八坂神社境内に二体あるのみで、他の行方は不明である。何れにせよ現在あるー・二の塚が色々の謎を含めて残るのみである。現在七十才位いの人達の中には、昔は五ヶ所有つたのを知つていると言う人、三ヶ所だけ知つていると言う人等、今は知る人が少くなり、開発が進むにつれ、其の痕跡すら見失う様になつてしまつた

此の塚の口伝は以上の如くであるが、此の中に古戦場と云はれているが此の時の合戦ではないかと思はれる記録が、越谷市大松にある、清浄院と云う寺に残されている縁起書の中に記載されている。

新方領六ヶ村
栄広山浄土寺清浄院由緒著聞書

前略

尚当山を六ヶ村の御堂と称しける事は、人皇第百五代後柏原天皇御宇、文亀の頃、夢飾新方領主の向畑城主、新方次郎大夫頼希主と、武

州埼西郡八条の領主、八条兵衛尉と陣あり、文亀四年甲子正月、八条兵衛尉平惟茂、兵を卒いて新方の地を犯す、新方之を聞くと等しく手勢を卒い向畑の城を出馬し、小林郷に対陣して数日いどみ戦ふ、同月晦日、新方頼希兵を進めて大いに血戦して、八条軍を追崩し勝に乗て深入し、流箭の為、命を落し新方敗軍す、八条兵衛尉新方の地を合せ領し、向畑の城をば、其の類葉、別府三郎左衛門に守らしむ。

新方軍弔合戦　別府三郎討死の事

永正十七年庚辰十月、高賢上人、兵を卒ひ、向畑の陳城へ押寄、囲を作つて責立れば、城将別府三郎左衛門、大いに驚き、差物を携へ、立出しが、元来不意の事なれば、討る者多かりける。三郎左衛門鞍坪に突立ち揚り大音声に呼ばわり、敵は誰人にて候と申しければ、新方の長官石川兵部左衛門というものを聞いて、事も遥かや、今宵の軍大将は、新方殿の御甥に渡らせ給ひ、栄広山高賢上人にておわしますぞや、悪逆無道の八条の者共、命おしくば降参せよ、頼希公の弔ひ合戦石川の働を見よ、先年羽人の峰合戦の刻、平井方勝民部小輔を組討にて、太田殿の賞を蒙りたるものと知りつらんと大音声に呼はり呼はり黒烟の中に馳入り前後左右に突立て突立て其の勢ひ鷹鷲の雀を追うが如く、三郎左衛門大いに怒つて、出家に以合ぬ軍立何程の事やあらん、踏殺して捨てよと言ひながら石川に渡り合い、火花を散らして切結ぶ。

八条が衆等、赤根太郎左衛門此の討乱を聞て有合の手の者三千騎（三百？）利根川を押渡り上人の後陳より突立ければ既に危く見えたるところ、此処に無音坊と云う荒法師、大刀打振り一人は黒革威の腹巻・白柄の長刀脛矩にくくり赤根の中陳に突入る事、迅風の撃す業か、赤根勢、是がだめに、陳は乱れて引色に見へしかば別府三郎左衛門大いに歎き、此の悪僧原を討取らずば戦い難義なるべしと、豪賢に突いてかかる、無量坊得たりと飛違い、別府が兜を破けよ砕けよと、続けざまに打すえしかば、さしもの姦勇並びなき別府三郎左衛門、人馬共に打ひしがれ有無も言わずに死にてけり。

赤根是を見て、人数をまとめて夜勿のごとく悪戦し、敵を討つ事数知れず、八条が者共、是を見て踏止まり勇を奮つて切返せば、上人の御陳再び危く見えたる処、浄勢坊在来聞えたる精兵強弓なれば、小高き所によじ登り普通の弓四五人張を引べき程なるを、十五束三界忘るる計り引きしぼり、ヒョーと射渡す処の矢坪たがわず、赤根太郎左衛門が鎧の弦走りより総巻付の板より、裏面の重をかけて射通し、矢先血潮に染つて出たれば、残党、愈々敗北総崩れとなりけり。

八条兵衛尉陣立の事

高賢上人、悦び斜ならず、向畑の城を焼払い勝どきを揚て引取り給う。

八条兵衛尉、此の事を聞、小作田隼人・柿木小膳等、八百余人、二陳大相模飛弾守・西脇近右衛門・領家八郎・国分寺藤九郎五百余人、八条兵衛尉壱千余人・軍司を司り、永正十八年辛

巳正月七日千間堀を打越し、新方に乱入すべしとなり。

高賢上人は、一山の衆徒・新方譜代の武士並に渋江の如勢を合せて壱千参百五拾余人を随いて、大吉村に出張す。先手は千間を前に当て、厳重に備えをして敵寄せ来らば劇しき一戦して追討にせんと、暫し在陳し、敵や寄ると待構えたり。

中略

新方軍夜討の事

此の日大吉郷の宮より、白鷺夥敷く南を差して飛び行く事、布を引く如し、浄勢坊本陣に有りし上人の御前に参り申しけるに、凡そ合戦の要は地の利を以て肝要とす、聞なり御陣場既に大吉の仰なり、今般神明擁護の印にや、白鷺南に飛行の事、逆寄せよとの告ならんか、又方角らいふに、正月南天道には、吉方顕とは孫子もいわす処、兵勝の術は密に敵人の機を窮い、其の不意を撃と言えり、御賢慮候へと申しければ上人大に悦び給ふと申したりとぞ。

正月六日の夜、人数を七手になし、千間を打越し不意に別府の陣に乱入、陣屋陣屋に火を放ち、黒烟の中に攻立ければ、八条勢の狼狽へ騒ぎ寄切られたる、八条の武士・別府・青柳・柿ノ木等、乱軍の中に討れしかば、敗軍本陣に崩れ懸りて何如んとも為すすべ無く、総敗軍となりたり。

此の時八条が叔父大曽根上野介と云ふ者、今宵瓦曽根に在陣して、新方勢を横より撃んとせし処、別府の方、ときを発し黒烟夥敷かりければ、此方の手配相遣して敵方逆寄せしものならんものと、鞭に鎧を合せて、別府に馳つけ、上人の後陣より攻立れば、八条勢是に力を得て、守り返し、勢に乗つて攻め立れば、殆んど危かりけり。

八条兵衛尉敗北の事

此処に、安国寺・浄恩寺、往古より栄広山の左右にてありけるが、一山退転の後は、自立の躰にて有しが、誠に住職も替りし故にや、今般の催促にも応ぜざりしが、何の衆議にや、両山大勢を卒い加勢として、六日の夜、大沢の辺迄出張しける処、別府の方、ときの声、黒烟てて見えければ、両寺の勢も皆さんと別府に至り、

中略

大曽根上野介の後陣より、切立たり。大曽根軍を切返し勇戦を奮ふ折柄、両寺の荒手に馳立てられ総崩れとなる。上人是に利を得て、軍扇を閃らめかし大音に呼て、味方上鑑になりたり、進めや進めと下知しければ、安国・浄音の両師勇み立ち、軍扇を開きて四方へ乗り廻り、勝たり勝たりと、下知しければ、八条勢勇なりと謂へども、初度の敗軍に寄切られ、勇士数多く討たれければ、終に敗軍し、大将八条兵衛尉も馬の足切落され、歩行立になり、自害せんと狂ふ折柄、小作田隼人揺かに見て飛来たり、己が馬に主を乗せて、八条の方へ落しけり。

其の身敵に取巻かれ、尋常に討れしかば、敵

も味方も之を見て、天晴なる勇者の最後と誉めぬ人こそなかりける。

今日は何如なる日ぞや、永正十八年辛巳正月六日の夜丑の半刻より、翌七日の朝まで、八条衆討死七百弐拾余人、新方衆参百弐拾四人と聞へし。

後略

高賢上人其日討死の亡骸を集めて大念仏を修行し彼我怨親平等の供養をなし、其地に墳墓を営むそ有難かりける事ともなり。

以上が、栄広山清浄院に残る由緒書の内、此の塚に関係ある部分である。

此処に記載されている合戦は、其の模様が良く書けていて、又参加した武将の名が多数在地名と合致するので其の内容には真実味がある。然し乍ら此の合戦に付いては、中央の歴史や埼玉県史又は、地方史の中にも記載がないので、其の真偽の程は確認出来ないが、飯島村に残る伝承と八塚そして清浄院の縁起書等より見て、合致するので、此の八塚は、永正十八年正月六日夜丑の刻より初まり、七日朝迄の新方と八条軍との合戦により戦死した人々を葬れる合戦塚であると比定したい。

観音寺

西方村に有り、新義真言宗、西方村大聖寺の持、山号本山と同じ何故なるかを知らず、本尊は観音を安ず。

此の寺の霊名簿に、西の家と云はれる、中村千枝氏の先祖の改名が記載されている。此れは中村重太郎氏が生前に書あげた過去帳を元として製作されているので、其の記載は同家のものと同一である。

初代　徳蔵院蓮法弘声居士　延久元年三月十八日没　俗名　小相模次郎

華蔵院妙祐弘福大姉　治歴二年五月二日没　不詳

と云う改名が記載されている。

観音寺叺の人柱

東方村、観音寺裏の元荒川堤に石碑が立っている。之は親娘の巡礼の哀れな話が残されている。

此の堤防は往時は切処として伝説が残されている処で、何度となく元荒川の氾濫に伴ない、各地の堤防が決壊しているが、此処も其の一つである。口伝によれば、そおゆう或時、相当激しく決壊して、田畑は勿論人家も殆んど侵水し幾日経っても減水を見せなかつた。困惑した村人は、色々と防禦の手を尽したが、其れも空しく、途方に暮れていた処、親娘巡の巡礼が通り

かかつた。其処で村人は此の巡礼に其の方法を尋ねたる処、巡礼曰く、「生娘を人柱に立てれば」既座に減水するであらう」と云うのであつた。人柱と言つても、誰を犠牲にするか思案の結果ついに、巡礼の娘を有無を言わさず、切処に投じてしまつた。すると、さしもの濁流が次第に減水し始め、数日にして、田面を見る事が出来たと云う。

北の様に人柱を立てた例は、橋等にも見られる、基礎工事として、杭を打てども、めり込む一方で、止らない処、生娘を人柱に立てた処、抗はぴたりと止つた等は、水辺に於ける伝説として共通なものである。

此の娘の霊を弔う為に　此の場所に今も、石碑が立つている。

八坂神社

見田方村にあり村の鎮守なり、来福寺の持なり。社の北裏より西にかけて、天明年中の大洪水の跡あり、、内池と云う、今に伝える伝説あり、別に記す。此の内池に面する境内に水神を祀る祠あり。

内池

元荒川に沿つて続く土手がある、急にコの字形にカーブしている処、此処は東方の久伊豆神社と見田方の八坂神社の中間で、土手内の約二千平方米余が窪く凹み、葭・茅・真菰などが叢生している。

此処は、天明年間の大洪水の時、決壊した場所と云われている。此の内池に白蛇（かなり大きなものと、土地の人は言う）が住み、たまたま通行する人を、内池に引き込んでは、水底に身を隠していたのであつた。以後土地の人は、此の内池を恐怖の池として眺めていたが、此の様な災難を二度と繰返さない様に、水神宮と弁天を祀つた処、彼の白蛇は何時しか消えて、再び、其の姿を現わさず、災害も無くなつたと云う。

又一つには、此の内池を「ヰイテケ堀」と呼ばれている。夕刻から夜にかけて、此の内池を通ると池のあたりから、オイテケ・オイテケ、と無気味な声が聞えて来ると云う、従つて通行人は、取るものも取りあえず、逃げ走る事がしばしばであつたので、此の内池を、オイテケ堀と云い伝えている。

古池や淵などには、此の様な曰くが良くあるものである。

久伊豆神社

東方村にあり、東方村の鎮守である。此の社の裏山より西南にかけての木立のある丘は、其の外側の地目が砂地であるのに、其処のみは、

砂まじりの赤土であり、明らかに盛土である事が歴然であるので、此の地は、古墳ではないかと思はれる。

今だ其処からの、出土品があつたとか、村人達の伝承等は聞いた事がないので、断定は出来ないが、其の外郭の砂地よりは、約二米程の高底差があり、今後の研究を待ちたい。

祭神は特に記載はないが、他の久伊豆神社がそうである様に、大己貴命（オオナムチノミコト）であろう。

一久伊豆神社は私市神社と云う事で、同義語の伝化である。国造の制度に改たまるにともなつて、移住して来た、私市部の部民は、出雲の祖神、大己貴命（おおなむち）を産土神とし、利根川の幹流であつた会の川の西南側と古綾瀬川、上流は元荒川の東側の細長き地域に分祀勧請したもので、後世に至る騎西郡の初祖神つまり産土神であり、之は後の代に入植したる野与党の人々も又、地先祖の神として祭る事は当然の事である。」

私市部の入植した騎西がサキタマ郡と言つた時代には埼玉命の名が見えるので、騎西郡と云つた以前には、埼玉郡（サキタマ）と云い、其の神社を前玉神社と称する社が騎西郡の北部に多数所見出来るので理解出来る。然し、騎西町より以南には前玉神社は見当らないので、埼玉郡の内何処ら辺迄、支配していたものかは、推定する事は出来ない。

中村千枝氏方墓の塚

中村氏方構堀の外の田の中に有り、以前は十八坪余の塚であつたが、田の中故次第に削り取られて、今では、其の影を止めるに過ぎない僅かばかりの塚である、発掘しても、何も出ず、何故の塚かも不明である。越谷市の史蹟と伝説の発刊の頃（昭和三十五年）には今だ影を見る事が出来たが、現在は住宅が立つてしまつた。

今一つの塚は、之も中村家の裏ではあるが、屋敷内で、現在は駐車場となつてしまい、之も跡形もなくなつてしまつた。以前は、高さ三尺、広さ四坪程の塚であつた、以前には応永二年（一三八五）銘の青石塔婆の他計五基があつたが、現在は墓地に移されている。

中村千枝氏宅と構堀

越谷市史　通史一　一九四頁　には、此の中村家の屋敷を、野与党系譜に見る大相模二郎能高の館であるとしている。

其の構は約六千坪にも及ぶ敷地を持ち、水堀や土塁等も良く残されている、築造年代は不明であるが、当中村家の過去張に、延久元年三月十八日没、俗名　小相模次郎とある

然し乍ら、中村家にある、小相模次郎なる人物の没年は一〇六九年であるので、野与党の祖、武蔵四郎胤宗の兄、千葉氏初代の常将の没年（六十七才）が承保三年（一〇七六）なので野与党大相模二郎の生存推定年代とては、百四十年程の開きがある。恐らくは、別系統の別人で有り、野与党一族の入植以前より居住していた者で、小相模次郎を名乗って居たものと見受けられる。

勿論、小相模次郎の館である事には違いないが、野与党の大相模二郎能高の居館ではないと言える。

又屋敷内には、塚があり、板碑等も良く保存されていて、中世の館としての構堀の形態も残存して居り、旧家としての貫禄充分である。

大聖寺

大相模郷西方村にあり、新義真言宗、京都醍醐三宝院の末、真大山と号す、末寺あり。

新編武蔵風土記によれば、大聖寺は、惣門の左、西側にあり、不動坊は、正面にあったものが、後不動院大聖寺となった。

此の真大山不動院大聖寺の境内地こそが、大相模二郎能高の居館跡と比定したい。其の敷地壱万弐千坪程あり、北に元荒川、西に水堀の取水口を持ち、遺溝も良く残されている。東には巳枝神社と、その南側には、馬場であったであろう地名が残り、館跡の面影を残している。

不動院

武州大相模不動明王瑞像記によれば、「古来伝えられた、縁起があったが、寛文中十余年をみんまいしたので、人伝にて云うには、良弁が相州大山で不動の霊容を拝し、其の尊像を刻まんとて、先づ其の木の根本を以て一刀三拝して刻し之を根本不動と名付く、先にて一尺七寸の不動明王を刻む。大聖寺開山の僧不動坊なる者夢の告げに任せ、彼の像を負ひ出して来りけるが、俄に笈が重くなりければ、之こそ有縁の地なりと、之の地に一宇を建てて安置すと。

又云う、不動明王は、根先二体を刻んだものだが、延喜年中（九〇一～二三）此の地に、一異翁あつて、毎日元荒川の水で沐浴し、不動明王を崇敬していた。相州大山に参詣する事十数回。一朝山伏が来て云うには、此の像は相州大山で良弁上人が刻まれたものだ。と言って置くと忽然と消えた。翁は此処で一宇を造って之の像を安置したと。

又外聞では、翁が相州大山に参詣の帰路、山中にて人のうめき声にあつたので、草叢を分け入った処、一体の像があったので、此れを持帰り安置したという。　中略

以上は、瑞像記と、之が裏付けと史実であるが、本寺の創建は、何時頃か、口伝に依れば、天平勝宝二年（七五〇）と云い、当時は不動坊と称し次いで不動院大聖寺と称する様になった

鐘は延暦年間（七八二～八〇六）に鋳造したと記されてあった事から推則すれば、奈良後期から平安期初めと云う事になる。　後略

利生院

西方村不動院の塔頭にあり、十一面観音を安置する。明治二十六年の火災にて焼失した。

利生院の利生は、能高の祖ともいえる、行長の号を龍大夫と云うが、利生大夫とも書く、又神倉龍蔵権現なる社があるが、龍蔵は恐らくは龍（利生）大夫を祖神としたものであろう、と云はれ、此の利生院も利生大夫を祀つたものではなかろうか、能高に取つては、龍大夫行長は直接の先祖様である。

大聖寺取水口

大聖寺を取巻く濠溝をたどると、西側の元荒川の土手に、取水をした口がある、今は、八条用水より取水して、落し口になつているが、瓦曽根堰が出来る以前には、水路も今より高く、容易に流入出来た事であろう。水源に通ずる遺溝には、昔時の堰が良く残されている。

此の取水口は、大聖寺方行と、直に南に向う溝とがある。此れは、今落し口となつているが、其の先をたどると、大聖寺の西側に、今一つの大きな館跡と、おぼしき地域を見る事が出来る。

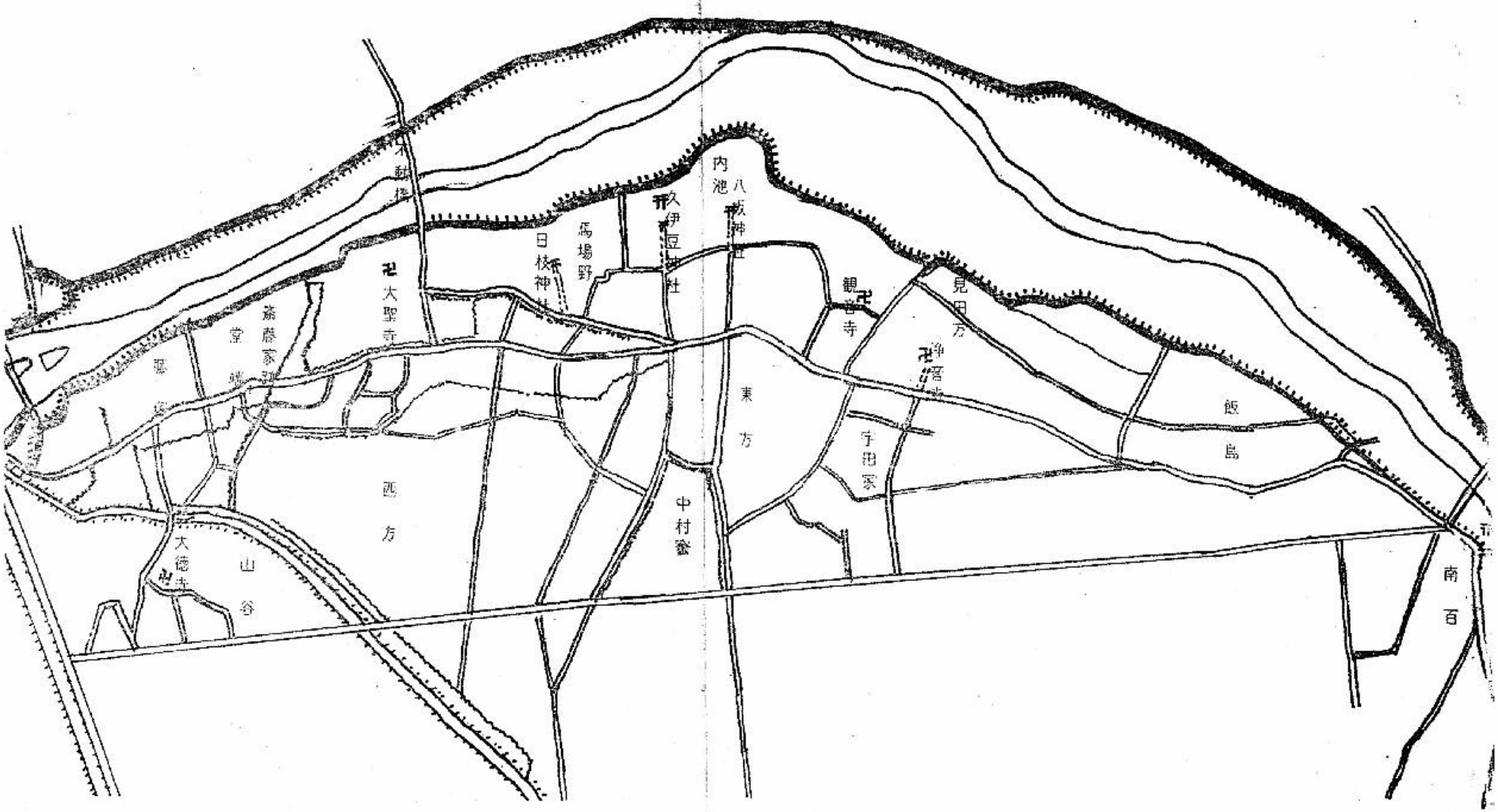
安養院のある場所に囲まれた区域で、頂度大の「」に当る地である。

大相模二郎能高の居館を、大聖寺境内と比定すると、其の西側の護りに、分家させたものとも考えられる。新方村清浄院の縁起に見える、大相模飛弾守と共に戦つた、西脇近右衛門なる人物がいる。一方の武将の一人と見受けられるが其の出所は不明であるが、此の文面に登上して来る人物が皆其の近辺の地名と一致とる名前の入々である。以上の事由にて、西脇氏も西方村在住の武将であつたのではないかと、推定出来る。大相模氏館の西であるので、西脇氏と称したと考えても不自然ではないのではないか。

安養院

西方村にあり、本尊大日如来、大聖寺の末寺なり。旧堂跡に十一面観音を安置する観音堂あり。安養院は、かつては立派な堂宇を持つていたが、本寺の大聖寺が火災で焼失後、少さくして再建されたが、大正十二年関東大震災にて、再び大破した為、安養院の建物を移築し、其の後現在の庫裏に使用されているのが其れである

福寿院

西方村藤塚にあり、阿弥陀如来を安置す、大聖寺の末、明治期に廃寺となり、現在は墓地と小さな寮があるのみである。

大相模郷